

春 立 つ

陽光ふりそそぐ海岸、ゆったりと寄せては返えず大波、波のしぶきは7色に輝く。
暖かい潮風にお花畑では菜の花やストックが咲き乱れる。南房総・白浜はもう春である。フラワー・ラインでは競輪選手が練習に励む。ほほを伝う汗、踏みしめるペダル、選手の足は黄金の足。ブーン・バイクのお嬢さんは足のファッションショー。春の声を待ちきれずに飾りたてる細い足にはボディーペインティングの蝶が飛びかう。街中をゆきあう足。装いをこらした足。太い足、細い足。そのすべてが平等に快よい響をたてる。春は足音と共にもうそこまで来ている。

教育のひずみ

未 就 学 児

「こういう子供もいるんだということは知って欲しい」、母親は勇気を出して就学児検診に出かけた。
恵ちゃん。7歳。精神薄弱。それもIQ25程度の重障児だ。
この障害さえなければ、この春、小学校2年生になる年だ。
質問する先生がとまどう。普通学級には、こんな子供がいないからだ。母親は、去年の春、恵ちゃんの就学猶予手続きをした。
しかし、就学を猶予しては、ますます、恵ちゃんは教育の場から遠ざかる。
両親は同じような子供を持つ親と手を取りあい、杉の子学園をつくった。16人の子供達のうち、創設3年の迎えた今年、11人が小学校に入る年を迎えた。
親は考える。「この子供達はどうすれば良いのか」を。
恵ちゃんの父は都内のある小学校の先生だ。
教壇に立ちながら考える。「教育とは何か」
その度に我が子、恵ちゃんが思い浮かぶ。
教育委員会の教育長は、「教育の可能な子と、そうでない子供がいるからねえ」という。
杉の子学園に通う子供達は、教育が可能でないというのでないというのだろうか。教育とはそんなものか。
誕生月を祝う子供達、この子供達も生きているのだ。
教育とは生きていくために受けるものなのではないのだろうか。
都内に1万人とも2万人ともいわれるその数。
義務教育の就学率世界最高といわれる日本にまだまだ多い未就学児がいる。